

蓬 左

HÔSA



神道正宗

大工の仕事に見る装飾へのこだわり

名城大学准教授 米澤貴紀

寺院や神社の建物では、龍や獅子の彫刻や、部材に浮き彫りされた装飾を目にする。こうした装飾も大工たちが手掛ける仕事であった。このうち、丸彫りの彫刻はこれを専門にする大工や、得意な者が手掛けたが、部材の先端を装飾的な形にし、表面に文様や意匠を浮き彫りする（この装飾のことを絵様と呼ぶ）ことは、一般的に大工の仕事であり、その技量を発揮するところであった。今回は、その仕事について、名古屋市蓬左文庫が所蔵する「伊藤満作家資料」（以下、「満作資料」）から、尾張の名工・伊藤満作と、その出自である伊藤平左衛門家の事例を中心に、目立つ部材について見ていこう。

柱の間に架ける水平材である虹梁は、絵様を施す代表的な部材である。その上部は緩い曲線形、下面を刳ったかたちをしている。その側面に、図1のような渦などの絵様を施すのである。また、側面下方を下面の刳りに合わせて削った部分を肩（まゆ）と言い、「満作資料」ではこの幅を厘（一厘は約〇・三ミリメートル）の単位まで指定する細かさを見せる。図1には「此の方がよし」という朱書があり、かたちの決定まで幾度かの検討をしていることがわかり、細部へのこだわりがうかがえる。虹梁の下面には錫杖彫（しやくじょうぼり）という彫刻が入れられ、図2は「満

作資料」のなかでも装飾的なものの一つである。

柱を貫きつなげる水平材の先端が、柱を越えて出た部分を木鼻（きばな）と言い、ここにも絵様が施される。図3は木鼻のうち、柱の頂部に入る頭貫（かしらぬき）の木鼻である。この図では、全体の輪郭を細線、表面に彫り込むかたちを太線、彫った中で山状に作る筋を点線と描き分けている。なお、右側の柱と接する部分が曲線になっており、この建物の柱の形状もわかる。

入母屋（いりもや）根には、側面に入母屋破風（はふ）という三角形の部分があり、そこに付く曲線状の板材・破風板（はふいた）から垂れているのが、頂部に付く懸魚（げぎょ）とその下方途中に付く降懸魚（けかぞし）である。ここでは同じ建物の懸魚（図4）と降懸魚（図5）、図は図4と揃う向きになるよう回転させている）を挙げた。こうして並べると、広い面を複数の部材で飾るため、統一感とバランスを考えていることが伝わる。どちらの図も実寸で、懸魚はその特殊な形状に合うように用紙は和紙を貼り継いで作っている。下方に延びる部分（鰭（ひれ））は、全体が左右対称であるため片側のみを描き、懸魚の中央に付ける六葉も描かれている。

より装飾的で特徴的なかたちの部材も見えてみよう。虹梁の上に立ち上部からの重さを受ける大瓶束（おおいづか）の例が図6である。部材の肩の形を朱線で直しており、細部の形へのこだわりが見える。

墓股（かぶまた）は、組物（くみもの）と組物の間に据える部材で、蛙（かえる）が脚を開いたような形状が特徴である。ここでは渦や

植物の葉を使って装飾し、全体も独特なかたちになっている。

こうした「満作資料」の図の多くは原寸大で描かれ、木材にこれを写して使ったものと考えられる。その写し方は、いくつか確認できる。最も多いのが図の紙に赤い顔料が付いているもので、これはおそらく念紙（ねんし）（薄い和紙にベンガラや朱を酒で溶いて塗り、乾かしたもの。カーボン紙のように使って転写する）を使ったものと推測される。その他には、等間隔の格子を使ったもの、下絵の線の途中を切り取り穴を開けて、そこをなぞって写すものがある。

また、修正されている図も多い。白色顔料で線を塗りつぶして直したものや、修正箇所（きしんしよ）に紙を貼って描き直したものがある。また、墨線と朱線で異なる線が引かれ、朱線が良いと書くものや、単純に墨線でかたちを直して採用する方に印を付けたものもある。こうした修正を見ると、明確にデザインが変わるものもあれば、線の曲がり方をわずかに直すものまで様々だが、いずれも一本の線まで見直し、良くしようとするこだわりが読み取れる。このように大工が念入りにデザインした絵様は、後の見本にもなった。

この点に関して、一枚の図に複数の建物名が書かれ、同じ絵様を異なる建物で使ったと想定できる例が興味深い。これらから、建物の規模や意匠の方向性などが合えば、出来映えの良い絵様は、そのままあるいは微調整を加えて改めて使えるもの

であったことが分かる。すなわち、一門の棟梁や名工が作成した絵様は、家・流派で継承すべき重要な記録であった。前稿〔蓬左〕第一一〇号〕で建物の設計技法を記した文書は大工家に重要なものとして伝えられていたことを紹介したが、それと同様の価値を持ったのである。

「満作資料」には、本稿で紹介した他にも、組物を構成する部材である肘木や拳鼻、曲線形の屋根である唐破風に使われる懸魚（兎の毛通しと呼ぶ）、階段を覆う屋根（向拝）の垂木と組物の間に入る手挟やその屋根の側面に取り付く板材である緋破風など、絵様や彫物を施す多くの種類の部材の図がある。それらも実寸の図が多く、修正箇所があり、実際に使われた下絵である。これらを見ると、寺社建築には装飾の付く部材の多さを改めて実感でき、大工の設計は、建物のかたちを決めるだけでなく、こうした絵様などの細部装飾まで及ぶことがわかる。

なお、この細部装飾の意匠、特に大工が描き彫る絵様は、大工家・流派ごとに特徴があり、建物を手掛けた大工を示すサインの役割も果たしている。続稿では、「満作資料」に登場する大工家の絵様の特徴を、絵様を見るための基本的な知識とあわせて見ていきたい。

謝辞 絵様については、魚津社寺工務店の小山興誓氏に多くのご教示をいただいている。ここに記して謝意を表する。また、本研究・調査はJGS科研費25K01409の助成を受けたものである。

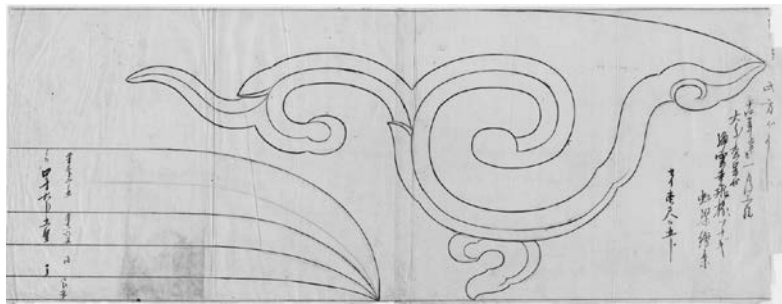


図1 大分松岡村浄雲寺飛椽ツナギ虹梁絵葉

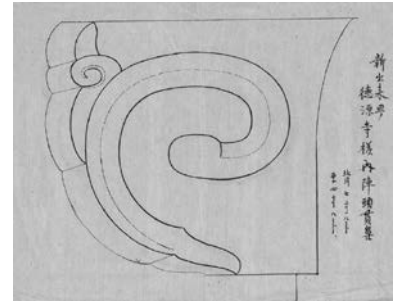


図3 新出来町徳源寺様内陣頭貫鼻

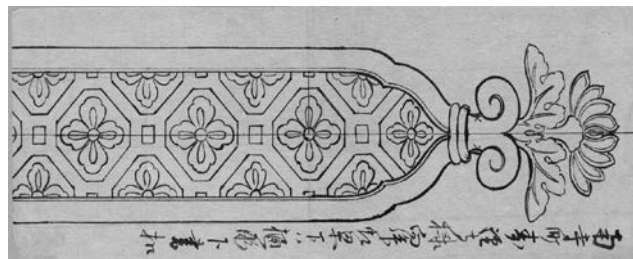


図2 南寺町寿経寺様向拝虹梁下ハ樋彫下書扣

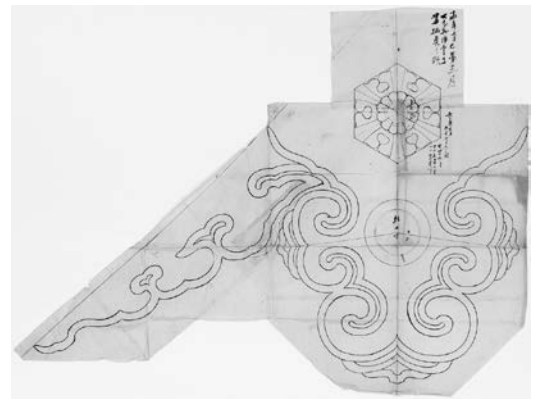


図4 大分縣浄雲寺妻掛魚之形



図6 京都八阪神社大瓶東



図5 大分縣浄雲寺妻大破風桁隠シ絵葉之形

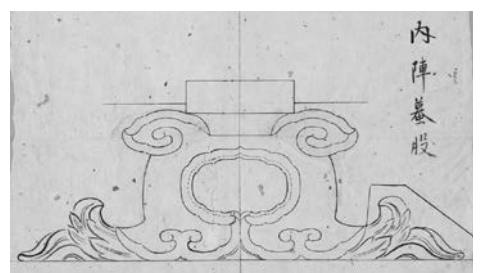


図7 内陣臺股

*掲載資料はすべて蓬左文庫蔵

『銅人經』 拓本を探る!? ⑦

尾張徳川家における『銅人經』

― 尾張徳川家伝来の蔵書目録を手がかりに

名古屋蓬左文庫学芸員 星子桃子

『銅人經^{どうじんけい}鍼灸^{しんきゅう}図^ず経^{けい}』(以下『銅人經』)について、今回は、伝来の蔵書目録を手がかりに、尾張徳川家でどのように管理され、位置づけられてきたか見てゆきたい。

蔵書目録が伝える『銅人經』

* 所蔵表記がない蔵書目録はすべて蓬左文庫蔵

蓬左文庫は、尾張徳川家の御文庫に納められていた古籍籍だけでなく、それらを管理・運用するために作成されてきた蔵書目録も合わせて引き継いでいる。蔵書目録は、元和三年(一六一七)に家康の蔵書の一部を「駿河御譲本」として尾張徳川家初代・義直が受け継いで以来、定期的に作成されている。当初は所蔵者ごと・受入順で記録されてきたが、蔵書の活用が進むにつれ、内容別分類目録や配架目録が作成され、機能的になった。

『銅人經』が初代義直の旧蔵書の可能性が高いこと、当初は時絵箱に納められていたことについては、既に『蓬左』一〇六号で指摘されているが、この情報は、寛政年間(一七八九―一八〇二)に作成された蔵書目録、『御文庫御書籍目録』『寛政目録』(図1)の記述に依拠している。

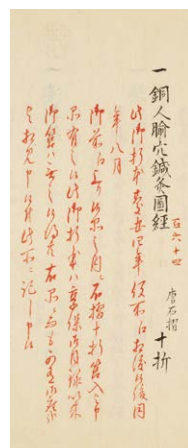


図1
『寛政目録』

『銅人經』はどこで保管されていたのか

* 左下図「表御書物蔵内での銅人經の位置」参照

『寛政目録』は、駿河御譲本および歴代当主・夫人の蔵書について記された目録で、掲載されている書物の多くは、名古屋城二之丸の馬場付近にあった表御書物蔵に納められていた。表御書物蔵の構造に関しては、『金城温古録』や表御書物蔵に出入りしていた尾張藩士・細野要斎(忠陳・一八一―一八七八)が御文庫についてとりまとめた『官庫雜記』(国立国会図書館蔵)所載の図から、東西二つの蔵を合わせた構造で、壁面及び中央部(中積／中之並)に書架が配置されていたことが窺える。

『寛政目録』と同年代に成立した表御書物蔵の配架目録『東西御文庫入記』(図2)によれば、『銅人經』は東側の蔵の中之並(中積)にある石摺^{いすり}之御箱に入っていたという。寛政期以降に作成された蔵書目録を横断的にみても、所在地に変化がなかったため、この配架状況は幕末まで維持されていたようである。

廃藩置県の後、払出を免れた『銅人經』を含む蔵書の大半は東京に移されたが、戦後、蓬左文庫が名古屋市へ移管されたことに伴い、再び名古屋に戻り、現在に至る。

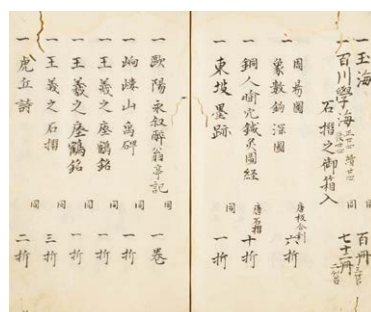


図2 『東西御文庫入記』

蔵書目録にみる『銅人經』の分類

『銅人經』は鍼灸医学書であるが、尾張徳川家では当初から、必ずしもそのように認識されていなかったように思われる。

御文庫の内容別分類目録として先駆的な存在である『御文庫御蔵書目録』(『天明二年目録』、一七八二/図3)では、『銅人經』は、石摺の法帖類と合わせて集部の「雑」に分類されている。この目録は、尾張藩の書物奉行をつとめた河村秀頼^{ひでかひ}(一七一八―一七八三)が、表御書物蔵の漢籍を四部分類(經・史・子・集)にもとづき編纂したもの。『天明二年目録』の分類は秀頼の漢籍に対する造詣の深さもしのばれるのだが、石摺を適切に位置づけているとは認めがたい。

だが、その後間もなく編纂された『寛政目録』では子部に分類され、医書として位置づけられている。これ以降に編纂された目録においては、『寛政目録』の分類が概ね踏襲されているとみてよいのだが、文化十三年(一八一六)に尾張徳川家が田安德

川家に提供した蔵書目録『御文庫御書目』（『文化十三年目録』、国立公文書館蔵／内閣文庫）においては、子部でありながら医書ではなく法帖類に分類されており、揺らぎも見受けられる。嘉永二年（一八四九）に細野要斎によって作成された『南庭官庫秘書目録』（国立国会図書館蔵）の医書抜書『南庭官庫医書目録』（武田科学振興財団杏雨書屋・蓬左文庫蔵）以降、一貫して医書として安定して分類されるようになった。

なお、現在蓬左文庫で運用している請求番号は、開館の頃から付されているもの。日本十進分類法とは異なる概念ではあるが、医書類は概ね四十番台と六十番台（『銅人経』の請求番号は六三―四六）に振り分けられており、近代以降も引き続き医書として位置づけたことが窺える。

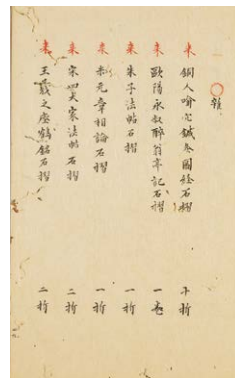
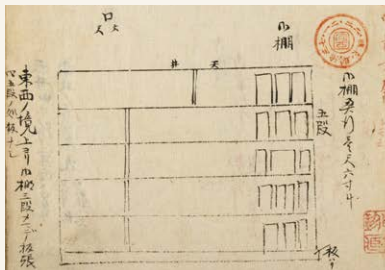
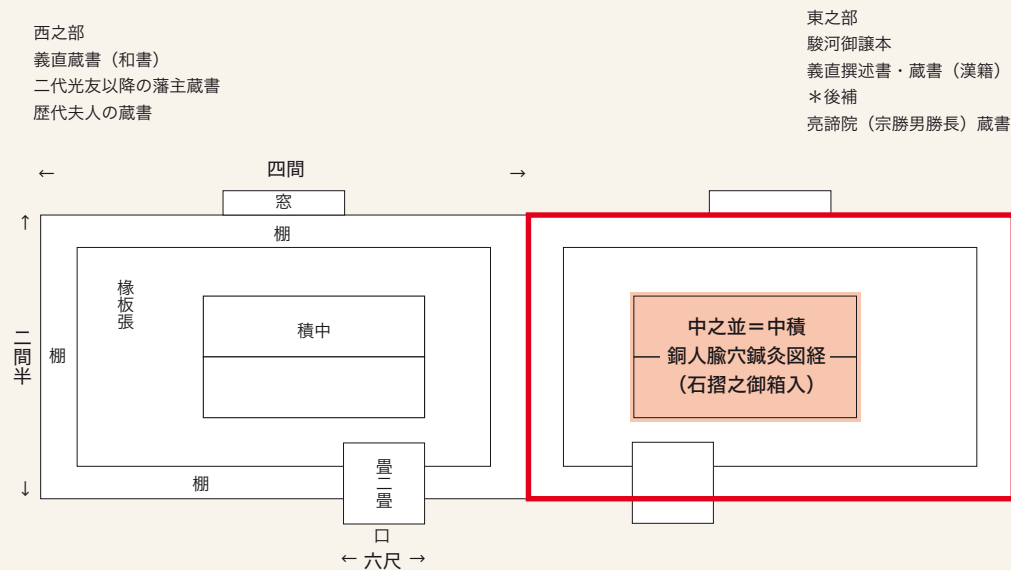


図3
『天明二年目録』

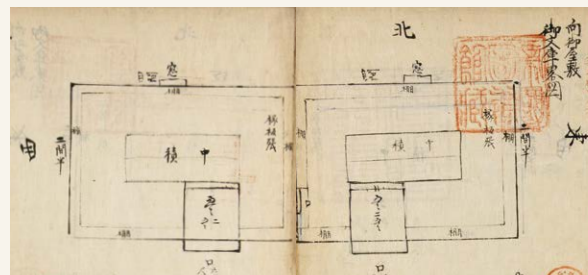
蔵書目録を通覧すると、尾張徳川家における『銅人経』の扱いを垣間見ることができる。しかし、義直・光友期当時の蔵書目録が一部欠落していることから、詳細な伝来経緯や時期等について依然として判断としない部分が多い。引き続き蔵書目録の探索・解読を進め、『銅人経』伝来事情の解明につながる情報を探っていきたい。

【表御書物蔵内での銅人経の位置 - 細野要斎『官庫雑記』（国立国会図書館蔵）より】

『官庫雑記』に付されている書物蔵の構造図に『東西御文庫入記』の情報を落とし込んだ



棚の様子



表御書物蔵構造図

名古屋蓬左文庫所蔵

美濃高木家文書について

蓬左文庫所蔵の美濃高木家文書（以下、東高木家文書と称す）は、旗本高木家（東家）に伝来した一大文書群の一部である。本稿では、旗本高木家の系図の整理と蓬左文庫に伝来した経緯を整理することにした。

まず、旗本高木家について整理しておきたい。

『寛政重修諸家譜』第五によれば、高木家の粗は貞政とされている。貞政は子貞久（？～一五八三）とともに斎藤道三に仕え、美濃国庭田・西駒野・羽根・髭丸・山崎郷など六郷を領し、駒野、今尾一円に勢力を有し、駒野（現海津市）に居住した。

貞政の子貞久は、道三没後に織田信長に仕えるようになり、天正八年（一五八〇）十一月には、五四二貫五〇〇文余りの地を与えられた。信長が本能寺の変で没すると、貞久は信孝に仕えたが、その後駒野に閑居し、天正十一年に没した。

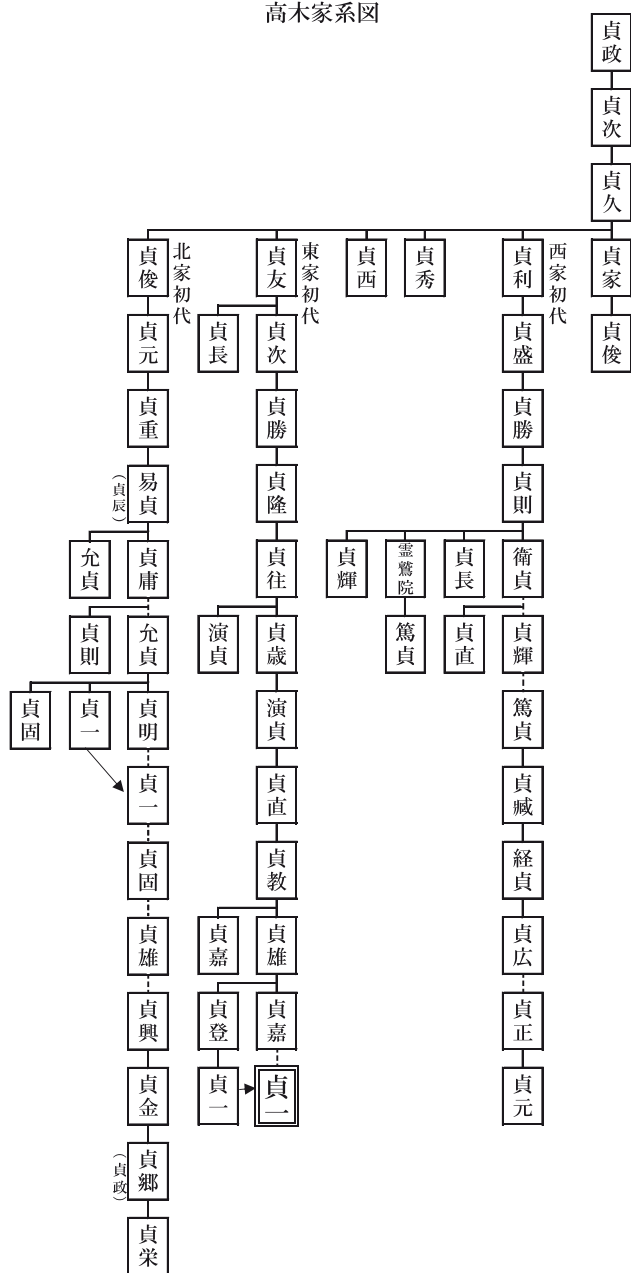
その貞久には、貞家（一五四

五～一五六八）、貞利（一五五一～一六〇三）、貞秀（一五五三～？）、貞西（一五五六～？）、貞友（一五六四～一六五八）の五人の男子があった。長男貞家は、永禄十一年五月、今尾城にて二十四歳で戦死したため、貞久は、遺児の貞俊（一五六三～一六四六）を自身の養子とし六男とした。この貞俊が北高木家初代、二男貞利が西高木家初代、五男貞友が東高木家初代である。この三家は、天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉に美濃を追われ、甲斐国に流れ着いた。

そして三家は徳川家康の庇護を受け、関ヶ原の戦い後に美濃国多良（多羅・現大垣市）に四三〇〇石（西高木家二三〇〇石、東高木家・北高木家一〇〇〇石ずつ）の知行を得、明治維新まで同地を支配した旗本となった。

また、高木家は、交代寄合の格式を持つ家であった。交代寄合とは、大名と同様に参勤交代を行なう寄合（旗本）という意味である。通常の旗本は、自身は江戸に居住し知行地に代官を置き領地支配をしたのに対し、高木家

高木家系図



は知行地に常住した。さらに江戸に留守居を置き、三家交代でごく短期間の参勤を行っていた。この特別な処遇は、高木三家が木曾三川の治水行政を担っていたためである。

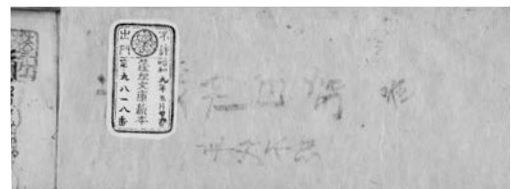
明治維新以降、西高木家は多良の地に居住し続けたのに対し、東高木家は、昭和初期に多良の地を離れ、それに伴い伝来する文書も手放したようである。その東高木家が手放した文書の一部を昭和八年（一九三三）に旧蓬左文庫歴史研究室が入手した。現在、東高木家文書は、蓬左文庫（昭和二十五年（一九五〇）徳川黎明会から名古屋市へ移管）、徳川林政史研究所、名古屋大学附属図書館（筒井稔氏寄贈分・森川勝之助氏寄贈分・古書店購入分）、大倉精神文化研究所、台湾大学図書館などいくつかの機関にまたがって所蔵されていることが確認できる。

では、当文庫所蔵東高木家文書を詳しく見ていくことにしよう。

東高木家文書には、旧蓬左文庫収蔵票が貼付されている。それらから昭和八年十月から同九年三月の約半年間かけて整理されたことがわかる。この整理段階で、表紙の汚破損著しい文書、そもそも表紙が欠落している文書には新たに表紙を付し、綴じ直しを行なった。収蔵票は、新たに作られた表紙に貼付されている。



【収蔵票①】



【収蔵票②】

東高木家文書の最初は、「天明元年（一七八一）丑九月七日 同寅二年 千之助様御家督一件 御在所二而日記」（高ナ五一―）【収蔵票①】であり、収蔵票には「昭和八年十月十一日」「高木義一寄贈」とある。この高木義一は、東高木家に何らかの縁があつた人物かもしれないが、三家の代々の当主には、実名（諱）に「貞」が使われていることから、寄贈者は「義一」ではなく、東高木家当主「貞一」であつたかもしれない。また、寄贈者が記されているのは、管見の限り三冊である。これ以降の収蔵票を確認していくと、「御役所日記 参 年

代不明」（高ナ五三―七―二九〇（二五））【収蔵票②】の収蔵票には「昭和九年三月二十六日」とあり、このころ全ての整理作業を終えたようである。

東高木家文書の形態の大半は、豎帳、横帳、横半帳が占めており、知行地の土地台帳や高帳、年貢の勘定目録、治水に関するもの、本分家関係にある三家の冠婚葬祭に関する文書、文化・文政期から明治初期の「御日記」（御用日記）、「御役所日記」、「当主日記」などの公用日記が比較的よく残されている。

また、「川通御用日記」八冊、「川除御目論見帳」八〇冊など、東高木家が担っていた川通御用に関する江戸時代後期の文書もある。ただし、東高木家の治水関係文書の大半は、戦前に東高木家が多良を離れる際、森川勝之助氏に譲られたため、当文庫所蔵分に治水関係文書は多くない。

現在、東高木家文書は、名古屋大学附属図書館を中心に複数の機関で分蔵されているが、「東海国立大学機構学術デジタルアーカイブ 高木家文書デジタルライブラリー」に一部公開されている。あわせて参照されたい。

（名古屋市蓬左文庫 粕谷亜矢子）

【参考文献】

石川寛編著『古文書・古絵図で読む木曾三川流域 旗本高木家文書から』

神道正宗

別名を『中臣祓抄』^{なかつのけしやう}といい、祝詞「中臣祓」の注釈書である。

中臣祓は、宮内で毎年六月と十二月晦日、および臨時的に催された大祓とその時の祝詞のことで、代々中臣氏が掌っていたことに由来する。この祝詞を唱えることによって一切の罪や穢が神々によって祓い清められるとされ、次第に神道の最重要行事の一つとして神聖視されるとともに、仏教や陰陽道の影響を受けて、神秘化されるようになり、各流派の教義を加えた注釈書が近代に至るまで膨大に書かれた。

本資料もその数多ある注釈書のひとつであり、尾張藩初代藩主徳川義直が自ら編纂した、または編纂を主導したとされてきた書物「敬公御撰述」^{けいこうごせんじゆ}に数えられている。

「中臣祓」全体を大きく十三段に分け、各段を「神孫降臨段」や「国家経営段」などと項目立てし、難産の際や家づくりの際に唱えるなどよいなどと効能を説いている。この構成は、吉田神道系の注釈書に多くみられ、注釈文自体も同様にその系統の注釈書を基本にしているようだ。本資料の特徴は、そこに儒教的な解釈への改編および追記をしているところで、神儒一体論者の義直の意向が反映されていると評されている。

ただし、本資料には著者や成立に関する記述はない。そのため、寛政期に成立した

『御文庫御書籍目録』には「源敬様御撰述御書目」に分類されているが、「御編撰二而も可有御座哉」、「御著述とハ難申奉存候」と注記されている。慶安四年（一六五二）の『御書籍目録』に「中臣祓」としてその存在が確認できるものの、それ以前の記録や蔵書印がないため、当時の者たちも本資料の分類に頭を悩ませたようである。この状況を打破したのが、別本の『中臣祓抄』（徳川林政史研究所蔵）であった。義直の蔵書印が押され、寛永七年（一六三〇）に蔵書となったと推定されるこの資料に記された添削内容がすべて『神道正宗』に清書されているため、御編撰であると判断したようだ。また、

林政史研究所蔵本の草稿本となるまた別の『中臣祓抄』（当文庫蔵）の存在も、『神道正宗』が義直自らあるいは、その命を受けた者が編纂したものである可能性を高めたようである。

なお、寛政二年の校合事業で、本資料もあらためて訓点の統一や注釈の追記が行われた。またそれ以前に名古屋東照宮神官・国学者であった吉見幸和により本資料を批評した『神道正宗評』（当文庫蔵）が書かれている。各人、各時代の「中臣祓」解釈を読み比べるのも面白いかもしれない。

（蓬左文庫 亀井久美子）

【参考文献】

『尾張名古屋の古代学』（名古屋博物館、一九九五年）
矢崎浩之「徳川義直と堀杏庵―神儒一致論に注目して―」（『国際関係研究』二九（二〇〇九年））

蓬左通信

例年、六月と一月に発刊している『蓬左』ですが、今号は少し遅れての発刊となりました。昨今の物価高騰や世界情勢の煽りを受けて、仕様や発刊頻度の見直しを迫られる事態となりましたが、ありがたいことに『銅人経』科研費の助成によって、なんとか現況どおり継続できるめどが立ちました。紙媒体の維持は年々難しくなっています。蓬左文庫のアイデンティティーをこの『蓬左』を通じて発信できるよう、これからも努めていきたいと思っています。

また今年度から、慶應義塾大学附属研究所蔵道文庫による駿河御譲本の調査が始まりました。最新の研究知見をもとに、江戸幕府の書物蔵「紅葉山文庫」の蔵書と比較したり、尾張徳川家伝来の蔵書目録を合わせてみていくことによって、新たな気づきがあるかものこと。調査成果については、折を見て紹介できればと思っています。次号は三月に発刊予定です。ご期待ください。

（蓬左文庫 星子桃子）

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <https://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※変更することがあります。

令和8年12月14日（月）～令和9年1月4日（月）は特別整理・年末年始により休館します。

■展示室／【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時（請求は午後4時30分まで） 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便・メールによる申込み可。



「蓬左」第111号 ☆令和8年9月11日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫 ☆年2回発行 ☆印刷：菱源（株）

本誌はJSPS科学研究費助成事業「蓬左文庫蔵『銅人経』拓本が秘める歴史資料・史実の徹底解明—古文書学的手法による」（基盤研究（A）・課題番号26H01919）の助成を受けています。